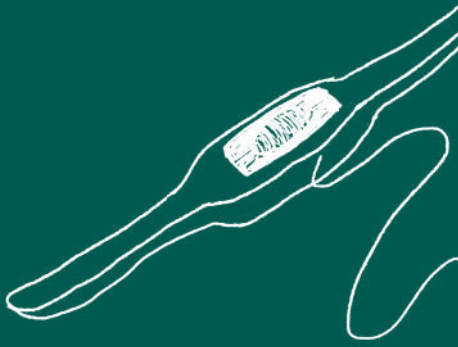
ASEAN HERITAGE TRAIL

Legendary Golden TEAK WOOD

伝説のゴールデンチーク



伝説のゴールデンチーク

周辺マップ

見逃せない観光スポット

博物館＆象の保護施設

美食の楽しみ

工芸品、デザイン、織物のすべて

イベントハイライト

伝説のゴールデンチーク

チーク材は主にミャンマー、タイ北部、ラオスに繁栄をもたらしました。堂々とした邸宅や荘厳な寺院、またチークの保護林が生み出された富を物語っています。

チーク材は19世紀の初めから、東南アジアの交易においてもっとも価値の高い商品のひとつとして評価されてきました。チーク材の取引は小説のような興味深いストーリーを生み出しました。それは、東南アジアのビルマ（現在のミャンマー）、ランナーの領地（現在のタイ北部）、およびラオスの一部を含む広大な地域の歴史と文化の物語でもあります。戦争、外国勢力の脅威、事業統合をにらむ戦い、交渉、権力を握る貴族階級、商人とおもしろい小説に欠かせない要素がすべて盛り込まれています。チーク材は現在のASEANの北西部全体の文化および歴史遺産に類まれなレガシーをもたらしました。

チーク材は、手触り、色、耐久性からきわめて価値の高い木材とされています。金色から赤茶色まで見事な色のバリエーションがあり、繊細な木目を持っていますが、特筆すべきは優れた耐久性です。多くの専門家が世界中で最高級の木材だと評価をしています。天然のチーク林はインド、および東南アジアのラオス、ミャンマー、タイなどに自生しています。そのため、チーク林はASEANでも特別なものなのです。

チーク材は長い間、世界中で愛されてきました。18世紀から、貿易取引において珍重されてきました。その高い耐久性は造船木材に最適で、特に欧州の貿易船にとっては理想的でした。ミャンマー南部のタニンダーリ沿岸には、アラブ商人がチーク材を使用して船を造り、初の船の修理所を設立した歴史的足跡が残っています。

ミャンマーはほどなくしてこの地域にチーク材の取引所を設立しており、特に1852年の第二次イギリス・ビルマ戦争でビルマがイギリスに敗北するとその流れは加速しました。イギリス領インドに併合されたビルマの一部地域は経済的に安定し、この地域で盛んにチーク材取引が行われるようになります。

地元の支配階級が商取引許可の権限を独占していたシャム北部にチーク材取引が拡大すると、タイ北部は広大なチーク林を背景とした独特の役割を担いました。

19世紀初頭の数十年間、ランナーのさまざまな王国や領地はシャムの属国として、毎年バンコクにチーク材を納めていました。それぞれの君主は同時に隣国ビルマの商人とも取引を行っており、とりわけビルマおよびタイ北部の民族であるシャン族とカレン族を介した取引が多く行われていました。

しかし、このように無秩序で時として法から外れる取引を制限し、チーク林の破壊に歯止めをかけ、ビジネスへの参入を狙う外国企業への統制を強めるため、国王ラーマ5世は1897年にRoyal Forestを立ち上げました。Royal Forestの役割はシャムにおけるあらゆるチーク材ビジネスに関する手続きの一元管理を促すことであり、伐採権の付与、および当然ながら税金の徴収を担っていました。

数年の間に伐採権が付与された5～6社の外国企業の多くはイギリスの会社でした。なかでも有名なのが、ボルネオ会社、ボンベイ・ビルマ・トレーディング社、Det Østasiatiske Kompagni（東アジア会社）、Louis T. Leonowens Limited、Siam Forest Companyです。中国企業のKim Seng Leeも伐採権を取得しました。20世紀初めの数十年の間に、企業は運河や鉄道などのインフラ整備にも関与するようになりました。

チークの切り出しは象が行っていました。象の丸い体と舗装がされていない場所にも入って行ける能力を活かして、丸太の運び出しに象が使われていたのです。機械化が進んだにもかかわらず、ミャンマーでは現在もチークの切り出しは象が担っているところもあると言われています。動物に対する丁寧で手厚い世話で知られている保護施設やキャンプでも多くの象を見ることができます。

タイ、ラオス、ミャンマーの3国では、チークの搬送に川も利用していました。タイ北部では、切り出した丸太をピン川、ワン川、ヨム川、ナン川に送り、バンコクのチャオプラヤー川まで搬送していました。ラオスでは、植民地時代にメコン川を使って丸太をサイゴン（ホーチミン市）まで運んでおり、ミャンマーでは基本的にイラワジ川を使いヤンゴンまで運んでいました。丸太を流すシーズンは主に5月から2月までとされていました。

チーク産業の発展によって地元の貴族と商人は財を手にするようになり、現在でもこの地域のいたるところでその名残を見ることができます。多くの都市がチーク材を使った家や寺院をどうにか保護してきました。その中でも必見のチーク材建築の遺産都市といえば、タイのプレー、ランパーン、チェンマイおよび、ミャンマーのバゴーでしょう。こうした都市では、繊細な彫刻や浅浮彫りが施され、巧みな職人技術が活かされた美しい家や宗教的建築物に出会うことができます。その他の地域は現在、国立公園か象の保護施設となっており、主に伐採現場で働いていた象が保護されています。チーク材がASEAN北西部の文化に深く根付いていることは間違いありません。このトレイルは世界でもっとも伝説的な木材のひとつに敬意を表し、また自然のもろさを再確認することで、資源だけでなく遺産の保護にも取り組むことを目指しています。

チーク材

2010年の専門家による調査では、ミャンマー、タイ、ラオスの3カ国の天然チーク林の面積は約2,220万ヘクタールでした。ミャンマーは1,350万ヘクタールで東南アジア全体のチーク林の60%を占めており、次いでタイが870万ヘクタールでした。ラオスは15,000ヘクタールとごくわずかにとどまっており、大部分はタイにあるチーク林が広がったものです。

数十年にわたり需要に応えてきたことでチーク林は枯渇していきましたが、近年は状況が変わりました。現在では、天然チーク林は保護されており、チークのプランテーションも拡大しています。

周辺マップ

伝説のゴールデンチーク

Thailand タイ

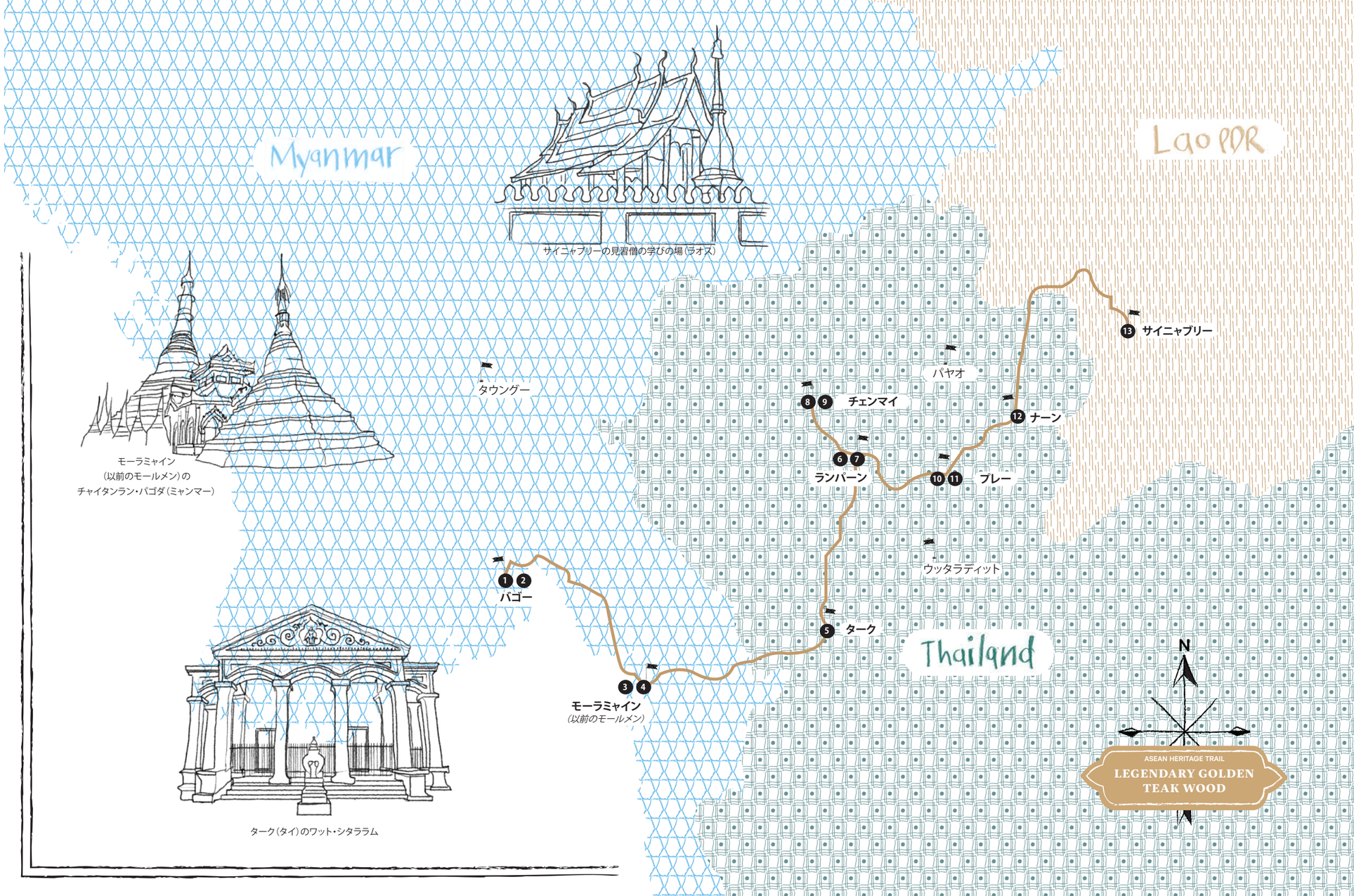
ターク（Tak）
チェンマイ（Chiang Mai）
プレー（Phrae）
パヤオ（Phayao）
ランパーン（Lampang）
ウッタラディット（Uttaradit）
ナーン（Nan）

Myanmar ミャンマー

バゴー（Bago）
タウングー（Taungoo）
モーラミャイン（Mawlamyne）
（以前のモールメン（Moulmein））

Lao PDR ラオス

サイニャブリー（Xayaboury）



旅行プラン

伝説のゴールデンチーク

旅行プラン名：

参加メンバー：	旅行日：

日付	目的地	移動手段	宿泊先

時間	行き先	すること

ルート

伝説のゴールデンチーク

見逃せない観光スポット

見逃せない観光スポット

❶ バゴーのチャイプーン・パゴダ

Bago, MYANMAR

バゴーから4.5kmのところに位置する、1476年に建設されたチャイプーン・パゴダには27mの高さの4体の仏像が鎮座しており、見どころのひとつです。この4体の仏像は、パゴダを取り囲む参拝場所であるイェンビン（Yinbyin）の隣に鎮座しており、涅槃にたどり着いた仏陀を表しています。

❷ モン州のチャイティーヨー・パゴダ

Mon State, MYANMAR

バゴーから約80kmのところにある、あらゆる旅人に必見のパゴダです。奇跡のように、小さなパゴダが金箔で覆われた巨大な花崗岩の上に乗っています。金箔は男性信者によって定期的に張り替えられています。さらに不思議なことに、パゴダを乗せたこの巨大な岩はいまにも丘から転がり落ちていきそうに見え、まるで重力の法則に逆らっているようです。言い伝えによると、パゴダにはブッダの聖髪が奉納されているために、岩が落下しないとされています。

Kyaikthanlan Pagoda in Mawlamyine (Moulmein)

モーラミャインの
チャイタンラン・パゴダ

Mawlamyine First Baptist Church

モーラミャイン初のバプテスト教会

❸ モーラミャインのチャイタンラン・パゴダ

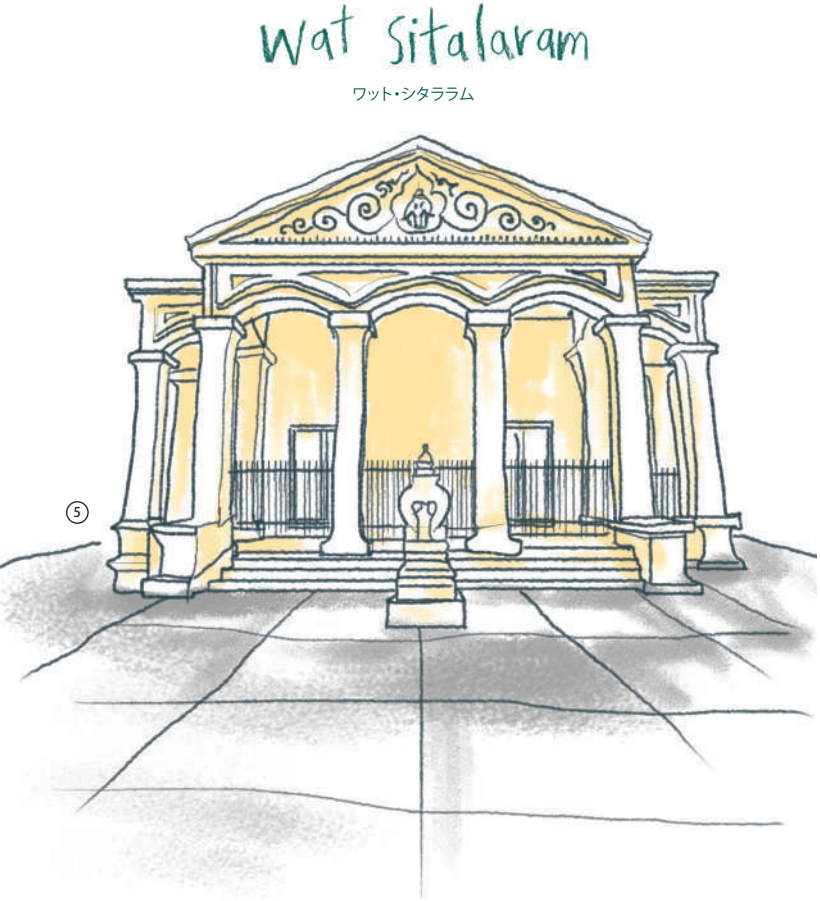
Mawlamyine, MYANMAR

モーラミャインでもっとも有名でもっとも高い場所にあるパゴダで、地上46mから町を支配するようにそびえています。875年に建設され、19世紀に全面的に修復されました。パゴダからは素晴らしい景色が広がっており、モーラミャインを一望することができるほか、周辺の島々やカレン州のライムストーン山も望めます。英国の小説家ラドヤード・キップリングの詩集「マンダレーへの道」に登場したことで、一躍有名になりました。

❹ モーラミャイン初のバプテスト教会

Mawlamyine, MYANMAR

1827年にアメリカ人宣教師のアドニラム・ジャドソンが建設したものです。教会の外観は英国の影響を受けたゴシック・リバイバル建築からインスピレーションを得ており、内部の建設構造や調度品に見られる巧みなチーク材使いが、モン州の地元職人の技術力の高さを物語っています。かつてモーラミャインがリトルロンドンと呼ばれる由来となった英国植民地時代の名残である建築物が、崩れかけている様子も見どころです。



5 ワット・シタララムとトローク バーンチーン（Trok Ban Chin） *Tak, THAILAND*

タークの旧市街にあるワット・シタララムは、ユニークな造りのヨーロッパ様式の大乗戒壇が見どころです。近くにはトローク バーンチーンという小さい路地があり、珍しいシャム時代の歴史的な木造の家が並んでいます。大半は建材にチークを利用している古い家並みが続き、路地全体が昔のシャム王国時代に戻ったようなノスタルジックな雰囲気に包まれています。かつて知事公邸だった建物は今はターク博物館になっています。

6 ガードコーンター（Kad Kong Ta）の街歩き *Lampang, THAILAND*

ランパーンで必見の、この古いマーケット通りには、ビルマ、タイ、ヨーロッパ様式が融合した複雑な木彫りを施した木造の家が無数に連なり、今でものどかな雰囲気が漂っています。こうした家々には、多くのビルマ、中国、ヨーロッパの商人を魅了した、チーク材からもたらされたランパーンの繁栄が表れています。週末になると通りは歩行者天国になり活気あふれるナイトマーケットに変身します。

7 ランパーンのワット・シーロン・ムアン *Lampang, THAILAND*

100年前にチーク林の伐採現場で働いていたビルマ系移民がチーク材のみを用いて建てた典型的なビルマ様式の寺院です。シャン様式とランナー様式が融合された珍しいスタイルで、木のパネルにはこまやかな彫刻が施されています。

Paying homage to Queen Victoria Chiang Mai

チェンマイのヴィクトリア女王記念像

8 チェンマイのチャルンラート通りと英国人の移住

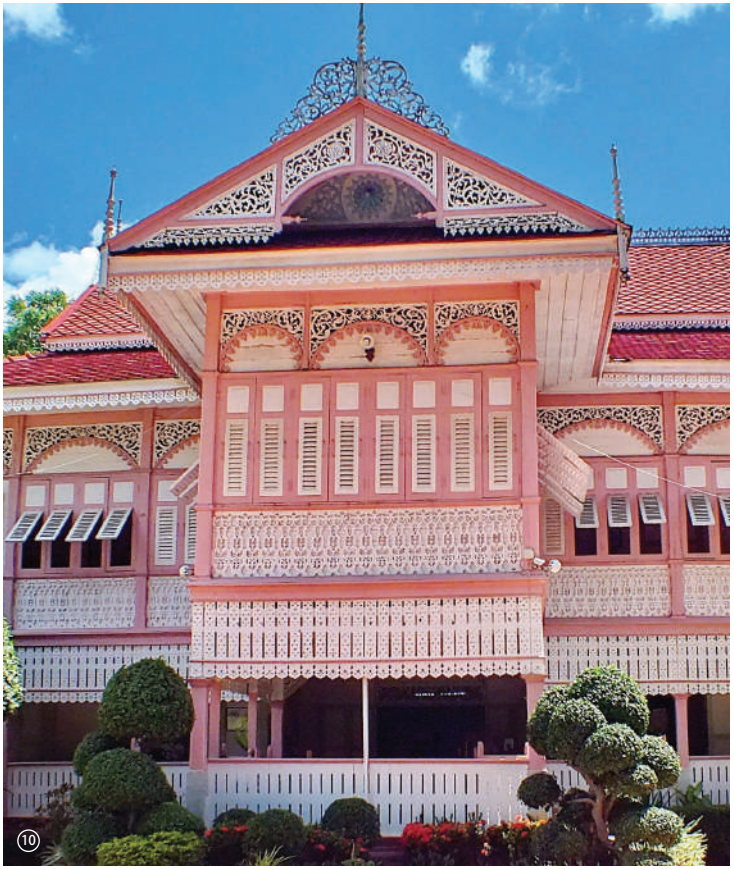
Chiang Mai, THAILAND

ピン川の東岸にあるチェンマイのチャルンラート通り沿いには、チーク材を使った美しい木造の家が並んでおり、デザインショップ、カフェ、レストラン、ブティックホテルが入っています。ボルネオ会社などのチーク材を扱う会社がこの通りにシャム本社を置いたことで、多くの英国人が移住してきました。ボルネオ会社のシャム本社は現在高級ホテル（137ピラーズ・ハウス）になっており、小さな博物館も入っています。ワット・ケートカーラームにも小さな博物館が併設されており、チェンマイのチーク伐採の歴史に関連する展示品が並んでいます。

9 チェンマイのヴィクトリア女王記念像

Chiang Mai, THAILAND

ロンドン、香港、シドニーのようにチェンマイにもヴィクトリア女王の像があるのです。チェンマイの外国人墓地に建っていますが、当初は1901年のヴィクトリア女王の死去後、「Her loyal subjects of every race（全民族の忠実な臣下）」が女王をたたえるために設置されました。ラングーンから象と運搬人によって運ばれた銅像は1903年、ちょうどクリスマスに間に合う頃にチェンマイに到着しました。当初は英国領事館のメーピン川岸に建っていましたが、1978年に領事館が閉鎖したことで外国人墓地に移設されました。



10 ASEANのチーク材邸宅の首都、プレー

Phrae, THAILAND

原生のチーク林に囲まれたプレーは小さな町ですが、シャム王国のチーク材取引の「首都」でした。1864年に東ボルネオ会社が進出してくると、ボンベイ・ビルマ・トレーディング社が続き、1897年にはデンマークの東アジア会社も広大な土地の伐採権を取得し、プレーに拠点を置くようになります。林業からもたらされた繁栄は50年間にわたって続き、地元の地主はチークの伐採権を払下げることで、大金を手にしました。そうして、プレーに豪壮な邸宅や別荘（大半はチーク材を使用したもの）が建設されたのです。少なくとも二十数軒の別荘は今も残っており、チーク材を使った建築遺産の保存状態および数において東南アジア最大級となっています。

⑪ チーク材のすべてが学べるプレーの森林学校

Phrae, THAILAND

国立公園・野生動物・植物保全局の監督下にあるプラチャラート森林保護協会（Pracharath Forest Protection Institute）は、東アジア会社と東ボルネオ会社がかつて所有していた伐採地にあります。小さな木造のバンガローが今も残っており、周囲には植物園や、チークのプランテーションがあるほか、チーク材取引の歴史が記された小さな博物館もあり希少な木片を展示しています。

⑫ ナーンにあるタイの「モナリザ」

Nan, THAILAND

ワット・プーミンは1606年にまでさかのぼるランナー様式の魅力的な寺院です。大乗戒壇の壁は見事なフレスコ画で覆いつくされていますが、これは1867年の修復時にタイルー様式で描かれたものです。男性が女性の耳元にささやきかけているタイでもっとも有名な絵画、「ささやく人」の絵もここにあります。タイではフランスのモナリザよりも有名な絵です。

Phrae City Museum
(Khum Chao Luang
Mueang Phrae)

プレー市立博物館

Admire Thailand
equivalent of
"Mona Lisa" in Nan

ナーンにあるタイの「モナリザ」

Wat
Sisavangvong

ワット・シーサワーンウォン

⑬ サイニャブリーの見習僧の学びの場

Xayaboury, LAO PDR

ラオスでもっとも位が高いとされる3つの寺院のうちのひとつであるワット・シーサワーンウォンは、サイニャブリーの町の中心に位置しており、見習僧が僧になるために学び、瞑想し、修行する場となっています。ここで学ぶことができるのは、ほんの100人ほどの選ばれた人たちです。地元の言い伝えによると、僧になりたければ、まずは寺院の中にあるナーガの像にお伺いを立て、黄金を捧げて徳を積まなくてはならないとされています。

伝説のゴールデンチーク

博物館＆象の保護施設

多くの地方の博物館で、その土地の独特の生活様式や地域の歴史を知ることができます。旅をしながら現地のコミュニティーについて学ぶにはうってつけの場所です。

バゴーのカンボーザターギー王宮

ミャンマー

バゴーのカンボーザターギー王宮（Kanbawzathadi Palace）。本来の王宮は1556年に建設され、全部で76の部屋と広間がありました。1599年に全焼しましたが、1990年に再建工事が始まり、1992年に元の姿に復元されました。部屋と外部の構造は極めて忠実に再現されているようにみえますが、オリジナルの調度品や王族が所有していた品々は焼失したため複製品です。それでも、バゴーの王族の暮らしぶりがありありと浮かぶはずです。王宮には現在、博物館（Nandawya Research Museum）が入っています。発掘現場の出土品が展示され、400年前の古いチークの柱、陶器、コイン、武器のほか、16世紀の仏像コレクションが並んでいます。

モーラミャインのモン州立文化博物館（Mon State Cultural Museum）。楽器、青銅器、銀食器、コイン、モン族の人々の像が展示されており、見どころは100年前の木彫りの仏像です。

タイ

ターク歴史博物館は、かつての県知事が暮らしていた建物に入っています。1958年にタイ国王夫妻がタークを訪れた際には、この美しい邸宅が宿泊先として利用されました。博物館には、アンティーク品や芸術品のほか、タークの多くの歴史遺産が収蔵および展示されています。上の階はプミポン・アドゥンヤデート・タイ国王の専用階となっています。

ランパーンのダナバディーセラミック博物館（Dhanabadee Ceramic Museum）。1957年にチキンボウルと呼ばれる鶏柄の器、ソースや飲み物用の小皿やコップを作り始めた地元の実業家によって、2012年に開設された博物館です。陶器はすべて地元の粘土で作られていました。博物館は、その会社とランパーンでの陶器製造の歴史について説明し、人気の鶏のモチーフ、および現代的な陶器のアート作品を手掛けるアーティストを紹介しています。

ランパーンのワット・チェディ・サーオラン（Wat Chedi Sao Lang）は、町から2km離れた田んぼの中に建っています。名前の意味は「20のチェディ（パゴダ）」ですが、並んだ20基の仏塔を見ればすぐに納得でしょう。裏の礼拝堂は、希少なラーンナーの美術品を展示する小さな博物館になっており、その大半は地元の人からの寄贈品です。もっとも高価な展示品は、150年前の純金の仏像です。

チェンマイのダラピロムパレス博物館（Dara Phirom Palace Museum）。チェンマイ北部、メーリム地区の107号線沿いに位置する、貴重な建物に入った博物館です。かつてダラ・ラスミ王女が暮らした邸宅で、建材はゴールデンチークだけを用いて建てられています。内部は豪華な装飾が施され、アールヌーヴォーのモチーフをふんだんに取り込んだ20世紀初頭のスタイルです。ダラ・ラスミ王女は仏教を擁護し、チェンマイにおいて文化的慣行を広めたことで知られています。庭園は最近復元されました。

チェンマイのクム・チャオ・ブリラット・ハウス（Khum Chao Burirat House）。歴史あるチェンマイの町の中心に位置する、チーク材を用いた典型的なランナー様式の美しい木造の家が、今はランナー建築センターとなっています。小さな展示室には、西洋様式とランナー様式が地元の家造りに与えた影響を紹介するため、家の模型が置かれています。庭園もあり散歩するには最適なのどかな雰囲気に包まれています。

チェンマイのマイイアム現代美術館（MAIIAM Contemporary Art Museum）。裕福なブンナッグ一族が所有するこの博物館には、故パッシリ・ブンナッグ、夫のジャン・ミッシェル・バーデリー、夫妻の息子のエリック・ブンナ・ブースが30年間かけて収集した見事なプライベートコレクションが展示されています。このミニマリスト様式の博物館には、常設展示室や企画展示室のほか、ショップおよびレストランも入っています。

プレー市立博物館（Khum Chao Luang Mueang Phrae）。プレー市の中心部に建つ木彫りの透かし模様が美しいチーク材の壮麗な邸宅は、かつてプレー県の知事が暮らしていました。すべての部屋が修復されており、この地の当時の貴族の生活様式が分かるようになっています。

プレーのバンウォンブリー博物館（Ban Wongburi Museum）。この博物館もチーク材を使った美麗な邸宅で、西洋建築の影響が入った建物は、中国人の職人が手掛けたものです。チャオ・スナンタ・ウォンブリー妃が所有していたもので、現在もその子孫が暮らしています。博物館には調度品や銀食器が展示されており、この地で大きな影響力を誇っていたウォンブリー一族について紹介しています。

ナーンのリムナーン・アートギャラリー（Rim Nan Art Gallery）。ナーン市の中央から数キロ離れ、森に囲まれた独特の環境の中にあるアートギャラリーです。現代絵画だけでなく、地元ナーンのアーティストの素晴らしい彫刻コレクションも展示しています。一度は見ておくべきユニークな場所です。

チェンマイのダラピロムパレス博物館

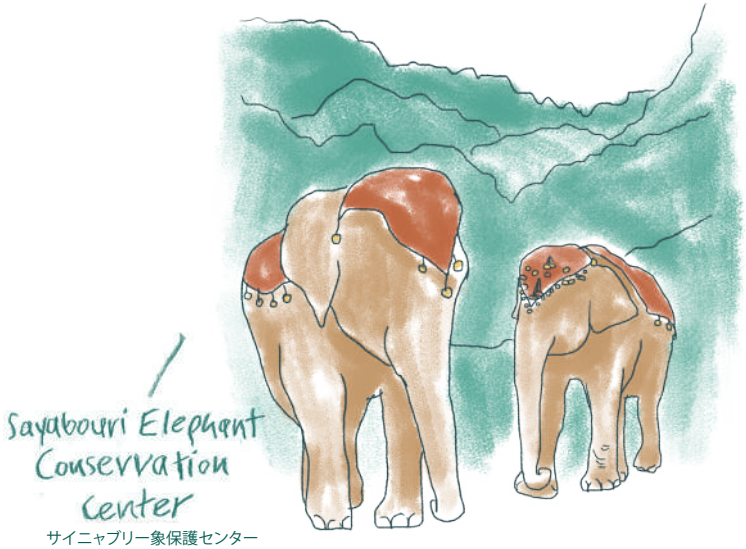
象について学ぶ

東南アジアに行くのであれば、象は絶対に見ておくべきです。象は山間部を含むあらゆる場所に入っていくことができ、生来の力も強いため、木材産業の一翼を担ってきたからです。現在タイでは伐採が禁止されていますが、ミャンマーを中心としチークなどの木材産業では今も象が活躍しています。その一方で、この20年の間に象の保護を目的として、保護センターや保護施設（サンクチュアリ―）も建設されています。しかし、本物の象の保護施設も、象にパフォーマンスをさせるショー目的のキャンプも、すべて象の保護をうたっているため、旅行者にとっては見分けることが難しい場合があります。ウェブ上で観光客向けのプログラム内容をチェックするのがもっとも良いでしょう。象がサーカスのようなショーをしたり、象に乗ることができる施設は避けた方が無難です。ここでは、献身的な象の世話で知られている2カ所の象の保護センターを紹介します。

チェンマイのエレファント・ネイチャーパーク

チェンマイのエレファント・ネイチャーパーク1990年代に設立されたエレファント・ネイチャーパーク（ENP）は、自然による保護施設（サンクチュアリー）かつ救護センターであり、主に観光客向けアトラクションで働いていた象を数十頭保護しています。パークは、チェンマイから約60kmのところにあります。ENPのスタッフは周囲の植樹も行い、植物と動物の生態系バランスを保つよう努めています。最初の5年間は毎年、山腹の約25エーカー（約10ヘクタール）で植樹を行う予定です。象の散歩、水浴び、餌やり、世話を体験し、象と触れ合う方法を学ぶなど、さまざまな日帰りプログラムが用意されています。宿泊施設に1泊する2日間の滞在プログラムもあります。

www.elephantnaturepark.org



サイニャブリー象保護センター

サイニャブリー象保護センター（Sayabouri Elephant Conservation Center）は、ASEANの中でも指折りの優れた保護センターと評価されています。2011年に専門家が集結して設立したもので、象の幸福、繁殖、動物医療を考慮したプログラムが設けられており、象使いの指導も行われています。保護されているのは、本来の生息場所から連れてこられた象ではなく、木材産業やマスツーリズムのアトラクションで働いていた象です。約29頭の象が530ヘクタールの保護林で暮らしています。ゾウ社会の集団に戻れるようになった象は、国立公園や保護地域に放されます。放される象の数は限られており、保護センターに留まる場合もあります。

www.elephantconservationcenter.com

ASEAN最大の象が集まる祭りがサイニャブリーで開催

古くから「百万頭の象の王国」と呼ばれてきたラオスでは、今でも象はラオスを象徴する生きたアイコンとされています。サイニャブリー県では毎年2月に象祭りが祝われます。この祭りは、ラオス社会と象の伝統的な結びつきを示すだけでなく、象が置かれている危機的状況について関心を集めることも目的としています。祭りでは、100頭もの象による堂々たる行進、象によるラオスの伝統儀式バーシー、果物や花の供物、僧侶による祝福、象使いと象のプレゼンテーション、ラオス国内外のアーティストによるパフォーマンス、象の屋外博物館など、さまざまなイベントが行われます。象は敬意をもって扱うべきであり、象に乗ることはお勧めできません。

美食の楽しみ

ミャンマー、北タイ、ラオスでは、肥沃な土地で育まれるオーガニック農産物による自然の風味を活かしたシンプルな料理が特徴です。ローカルフードの主食となるのは、果物、野菜（サヤインゲンやキャベツがよく用いられます）、米に加え、タケノコ、カボチャ、大豆などで、多くは豚肉か鶏肉が添えられます。香り付けにエシャロット、スプリングオニオン、ガーリック、レモングラス、コリアンダー、ターメリック、ジンジャー、ガランガル、チリなどが用いられています。これらの国々では、アカ族、モン族、シャン族などの伝統料理を試すこともできます。

カオソーイ

モン族とタイルー族の民族料理

伝統的なモン族の料理は、それぞれに調合したカレー粉を使い煮込むものがベースになっています。多くの栄養素を含んでいますが糖質と脂質が少ないため、ダイエット中の人には最適です。主に野菜、生のハーブ、スパイスを使います。モン族の伝統料理を楽しむには、レストランの数も多いモーラミャインが最適ですが、山岳民族が去りつつあるチェンマイ周辺の村でもモン族の料理を見つけることができるはずです。バーン・パーモン村は、パガーコーヨー族の人々の習慣を学び、地元料理に触れたい観光客を歓迎しており、村の人によるブ（Ber）の料理教室もあります。Berとはカレーの一種で、ご飯に青いラタンヤシと豚ひき肉を混ぜるか、またはパガーコーヨー族のオリジナルチリペーストを混ぜて作ります。このチリペーストの中身はチリとエシャロットですが、なんと茹でたコオロギまで入っています。

チェンマイ県では、ドイサケット地区のバーン・ルアンヌアでタイルー族の民族料理に挑戦してみてはいかがでしょうか。チリペーストと混ぜたカエルに「エレファントイヤー」（緑の野菜）、またはハーブとチリで煮込んだ田んぼに生息するカニを添える料理です。

ゴールデンチーク材トレイル沿いの名物料理

ミャンマー

モーラミャインのティンヤン・ワックスライス（Thingyan Wax Rice）。モーラミャインは、ミャンマーでは独創的な料理で知られています。ティンヤンのワックスライスは、モン州の伝統料理ですが、ミャンマーでもモン州以外ではなかなか見つけることはできません。ご飯にロウで香りづけした水をかけ、氷を乗せた料理です。マンゴーサラダ、または熟していないマンゴーをすりおろし、魚の干物と一緒にターメリックとオニオンで香りづけして炒めたティンヤン料理を添えていただきます。

パン・テー・カウ・スェー(Panthay Khauk-swe)は、麺の上にオニオン、トマト、ターメリックで漬け込んだチキンのカレーをのせたものです。インド料理からヒントを得ています。

タイ北部

牛肉、鶏肉、豚肉のいずれかを使うケーンオム（Kaeng Om）は、タイ北部の名物料理です。カレーペーストと野菜で肉を煮込み、シュリンプペーストで香りづけをしたスープです。

ランナーのカオソーイ（Khao Soi）。タイ北部で好まれているシンプルな料理です。ライスヌードルを、ターメリックを混ぜた濃厚なスープに入れた料理で、ココナッツミルクが味をまろやかにしています。一般的には、角切りのレッドオニオン、コリアンダー、ワケギ、野菜の酢漬けが添えられます。

ケーンハンレー（Kaeng Hung Ley）もランナーを代表する料理です。宗教的な祭日に僧にお供えをするのは徳を積むこととされますが、多くの人がケーンハンレーを差し出します。ケーンハンレー自体も縁起物とされています。豚バラ肉に、ジンジャー、タマリンドペースト、酢漬けニンニク、チリ、ガランガル、レモングラス、シュリンプペースト、ローストピーナッツを混ぜ合わせた料理です。これらが混ざり合い、ややスパイシーで甘辛い味わいとなります。

カノム・ジーン・ナム・ニャオ（Kanom Jeen Nam Ngiao）もタイ北部の名物料理です。生のもやし、酢漬け野菜、ライム、揚げたドライチリ、ポークラインズの上に、フライドガーリック、ワケギ、千切りにしたコリアンダーを乗せたものを添えることが多く、花粉やキワタの花がさらに風味を加えます。

ラオス

青パパイヤサラダ。タムマークフンと呼ばれる青パパイヤサラダは魚醤を使うために味が塩辛く、タイ生まれのパパイヤサラダとは違うものになっています。タイのパパイヤサラダにはピーナッツが入りますが、ラオス版には生のナスが入ります。青パパイヤの他には、パームシュガー、ライム、ガーリック、トマト、干しエビ、チリなどを昔ながらのすり鉢に入れてつぶしながら混ぜ合わせます。

ラオスソーセージは豚肉のソーセージで、レモングラス、ガランガル、カフィアライムの葉、エシャロット、コリアンダー、チリ、魚醤をミックスしたものに混ぜ込みます。これによりソーセージに独特の味わいが生まれます。もち米を添えるのが一般的です。

工芸品、デザイン、織物のすべて

タイ北部やラオスで見られるランナー文化、ミャンマーのモン族およびシャン族の文化には、豊かな伝統があり、この上なく美しい織物、銀食器、宝飾品、陶器、チーク材を使った品々に見てとれます。チェンマイは最近、東南アジアでもトップクラスのデザイン都市になっており、チェンマイ出身の多くの才能豊かな若手アーティストがランナーの伝統工芸品に新たな息吹を吹き込んでいます。

チェンマイのセラドン焼き

チェンマイの若手デザイナー。ファッションや手工芸品の独創的な一品をお探しですか？地元のファッションデザイナーの製品を見てみませんか？ミニマリストショップの**The Localist**に行ってみてください。チェンマイの若手デザイナーが手掛けた選りすぐりの布製品、洋服、陶器、木工品が集まっています。The Localistではワークショップも定期的に開催しています。最近、メーチェム郡の織物が再び盛り上がってきているのは、ワットケット地区にある店**Nussara**が関係しています。カラフルでファンキーなデザインのsinh teen jok（丸みのあるスカート）の売上がますます伸びているのです。ペーパークラフト専門店を併設するKRADAS Caféでは、美しいペーパークラフトの作品を眺めることができます（購入もできます）。2016年に小売デザイン部門でチェンマイデザイン賞（CDA）を受賞しました。

チェンマイのセラドン焼き（Chiang Mai Celadon）。タイでは700年以上にわたって、緑色、そして時に黄色や青色の陶器が作られてきました。セラドン焼きはタイの3大焼き物の1つです。セラドン焼きは今も工房と店を併設する窯元の「バーンセラドン」で作られており、セラドン焼きを作る工程も見学することができます。伝統的な工房であるバーンセラドンから生まれる製品はチェンマイおよびランナーの伝統の一部になっています。

ランパーンの陶器。ランパーンでは陶芸は伝統工芸として長い歴史がありますが、有名なチキンボウルが作られたことで、1957年以降は陶芸がますます盛んになりました。最近ではランパーンのどの陶器にも町のシンボルになった雄鶏の絵が描かれており、多くの工芸品店ではデザインに現代風のアレンジを加えています。

ナーンのシン（Sinh）。ナーン県の人々は自分たちの作るシンに誇りを持っています。シンとは綿または絹で作られた服を指します。パ シン マン（Pha Sinh Man）またはシン マン（Sinh man）は普段着使いの服で、通常は青く染めた布にピンクと白の縞模様が入っています。シン チャン セン（Sinh Chiang Saen）はプレーンな綿の服で、色は赤、紫、緑が多くなっています。よりエレガントなシン ポン（Sinh pong）は絹と綿を合わせ使いした布に金と銀のラメが入っています。シン カム カーブ（Sinh Kham Kerb）はかつては上流階級や支配階級だけに許されていたもので、金と銀のラメを織り込んだ格調高いデザインになっています。シンはナーン周辺の店や村で販売されており、ほとんどは綿を使ったものです。

モーラミャインの沖に浮かぶオグレ島（ビルー・チョン）は手工芸品で有名です。チークなどの木材を使った楽器、伝統的なモン族の織物、帽子などの竹製品を作る工房を訪問することができるはずです。

ラオスのサイニャブリー県のホンサー郡とグン郡は**ラオスの綿産業**の中心地です。グン郡のビミ（Ban Bi Mi）村と、ホンサー郡のヴィエン ケオ（Ban Vieng Keo）村は綿の生産地で、綿の栽培から織りあげて製品にするまでの全工程を一般公開しています。地元の腕の良い職人による綿の刺繍生地は、ショルダーバック、伝統的腰布のシン、テーブルクロス、カーテンなどに最適です。綿織を行っている村では毎年12月に糸を紡ぐ儀式が催され、夜になると火を囲んで座った地元の女性たちが綿糸を紡ぎます。

ナーンのシン

イベントハイライト

モン族の古典舞踊はミャンマーはもちろん、モン族のコミュニティーがあるタイの一部地域でも見ることができます。この古典舞踊は次の8つの伝統的な踊りで構成されています。歓迎の踊り、子どもの踊り、水祭りの踊り、ろうそくの踊り、求愛の踊り、男女2人形式の踊り、女性1人形式の踊り、別れの踊り。

ミャンマーのティンヤンフェスティバル（Thingyan Festival）は、ビルマ暦の新年を祝う水かけ祭りです。ティンヤンの前夜は祭りの初日となり、宗教的行事が行われた後、夜のパーティーで締めくくられます。その翌日は銀のボウルに入れた香りの付いた水を人にかける伝統行事が行われ、祭りがもっとも盛り上がります。この日は人形劇、伝統舞踊や音楽のパフォーマンスも行われます。古代ビルマの王は、モーラミャイン近くのシャンプー島から取り寄せた清水で髪の毛を洗う儀式を行っていました。

チェンマイのイーペン祭り（Yee Peng Festival）は、ライスペーパーで作られた無数の灯ろうが火を入れられて舞い上がり、チェンマイの夜空を明るく彩る美しいお祭りです。イーペン祭りは通常、タイ全土で行われるロイクラトン（灯ろう流し）の祭りの先駆けとして行われます。イーペン祭りの期間中、地元の人たちは家や公共の場をカラフルな灯ろうで飾り付けます。タイの古典舞踊のショーも行われます。灯ろうが空に放たれる瞬間をもっとも美しく眺められる場所を探しているのであれば、マエジョ大学で開催されることが多いイーペンの公式パレード（Yee Peng Parade）を見に行くとよいでしょう（チケットはウェブサイトで販売されます）。

タイ北部のロイクラトン（Loi Krathong）。毎年11月にタイ全土で催される祭りですが、北部ではより伝統に忠実なようです。北部では伝統衣装に身を包んだ人々が、川にろうそくを流していきます。

ナーンのターン グエイ サラーク（Tan Kuai Salak）フェスティバル。タイ北部の至るところで行われる祭りで、仏教徒にとっては重要な徳を積む儀式です。ナーンでは伝統的な船のレースも行われます。船は大きな丸太で造られており、船首はナーガの形に彫られています。フェスティバルと船のレースは10月中旬から11月上旬の間に開催されます。

タイ北部のロイクラトン

サイニャブリーのブン コン カオ ヤイ（Boun Kong Khao Yai）祭りはサイニャブリー県の南約37kmのところにあるピエン郡のソムサワン村で毎年1月末に開催されるお祭りです。マーケットフェア、稲の儀式、象の行列、太鼓演奏のコンテスト、歌のコンテスト、米の豊作を祝うこの地域の伝統的パフォーマンスなど、さまざまなイベントが行われ、この土地の農地の大切さを広めています。

チェンマイのイーペン祭り

ラオス・サイニャブリーの精霊と幽霊の祝祭。

サイニャブリーでは何百年も前から精霊および幽霊は日常生活の一部であると考えられてきました。

サイニャブリーのピーターコーン・フェスティバルは、タイのルーイで行われる有名なピーターコーン・フェスティバルのラオス版であり、3月から4月の間の3日間にわたりパクライ郡で開催されます。1日目にはゴーストフェスティバルを行い、地元の精霊のピーターコーンに安全を祈願します。もみ殻やココナッツの葉で作ったマスク、米を蒸すのに使うカゴで作った帽子を身につけた地元の人々によるパレードが行われます。鐘や太鼓でパレードの雰囲気をさらに楽しく盛り上げていきます。2日目は通常、衣装およびダンスのコンテストやロケットフェスティバルが行われます。

ワット・シボヌアン（Wat Sibounheuang）のブン パウェット（Boun Phavet）も、寺院が建つ丘に住む森の精霊のための祭りです。ワット・シボヌアンは1456年に建立されたサイニャブリー最古の寺院です。県最大の長さ7mの黄金の大寝釈迦仏があります。祭りは3月中旬ごろに開催され、パウェットをたたえる行列が行われます。森の精霊の行列は墓地からスタートし、締めくくりには衣装を燃やして川に流します。

Information

タイ北部
www.tourismthailand.org

www.chiangmai.go.th
www.museumthailand.com

ミャンマー
Myanmar.travel

インドネシア
www.tourismlaos.org
www.tourismsayaboury.org

Legendary Golden
TEAK WOOD
Online version

ASEAN HERITAGE TRAIL
Legendary Golden
TEAK WOOD

1st Edition 2019
Printed in Thailand

ISBN 978-974-679-296-7

発行
Tourism Authority of Thailand
www.tourismthailand.org

ライター
Luc Citrinot

デザイン
Unplan Co., Ltd.

All rights reserved. 本誌内容を無断で複写、複製、転載、転記することを禁じます。

ASEAN各国への渡航や入国、またASEAN域内での国境を越えた移動には、さまざまな規制や制限が出ています（2021年2月現在）。最新情報は、各国の日本国大使館または外務省のウェブサイトをご確認ください。

この冊子は、発行元のタイ国政府観光庁（TAT）の許可を得て、日本アセアンセンターが翻訳・編集をしたものです。著作権は、発行元に帰属します。

翻訳：国際機関日本アセアンセンター

ASEAN-JAPAN
CENTRE

Tourism Authority of Thailand
1600 New Phetchaburi Road, Makkasan,
Ratchathewi, Bangkok 10400, THAILAND
Tel. +66 2250 5500
Call Center 1672